

競合モデルに基づく中国人日本語学習者の「可能性」の モダリティの習得調査

玉地 瑞穂*

The Competition Model-based Analysis of the Chinese Learners' Acquisition of Japanese Modal Markers of 'Possibility' in Japanese

Mizuho Tamaji

要旨

機能主義言語学に基づく言語習得モデルは、言語習得の基本的側面は言語形式と意味・機能のマッピングを通して「話すための思考法」を習得することだと考える。このことは、第一言語と第二言語におけるマッピングが異なっている場合、第二言語習得における干渉となることを示唆している。本研究では、中国人日本語学習者の可能性のモーダルマーカの習得をケーススタディとして、第一言語とマッピングが異なる第二言語の習得を競合モデル (Bates & MacWhinney 1981) に基づいて分析することを目的とする。調査の結果、学習者は第一言語干渉、中間言語という段階を経て第一言語と異なる新しいマッピングを習得するという知見を得た。また、この結果から言語教育や言語学習において、言語類型論の観点と機能主義言語学に基づく各言語のマッピングパターンの分析が有効であるという提言を行う。

キーワード： モダリティ、マッピング、原型性、競合モデル、キュー

Abstract

The functional linguistics oriented language acquisition models consider that the basic aspect of language acquisition is the acquisition of “thinking for speaking” through the mapping patterns of linguistic form and meaning. This indicates that the difference of mapping patterns between in L1 and in L2 is the interference on the process of L2 acquisition. This study aims to analyze the process that learners acquire L2 mapping patterns which differs from those in L1 based on the Competition Model (Bates &

* 高松大学経営学部専任講師

MacWhinney 1981) dealing with the case of Chinese learners' acquisition of Japanese modal markers of possibility. The result demonstrates that learners acquire the new mapping patterns experiencing the stages of L1 transfer and interlanguage. The findings suggest that the perspective of linguistic typology and clarifying the mapping patterns in each language based on the functionalism are effective to the language teaching and learning.

Keywords: modality, mapping, prototypicality, the Competition Model, cues

1. はじめに

機能主義言語学に基づく言語習得理論によれば、言語習得の基本的局面は言語形式と意味のマッピング (Form-Meaning Connections) の習得であると考えられている (Van Patten et al. 2004)。Slobin (1994) によれば、我々は第一言語習得における形式と意味のマッピングの習得を通して「話すための思考法 (thinking for speaking)」を習得する。したがって、第二言語習得とは新しい形式と意味のマッピング方法の習得であり、すでに第一言語習得を通して習得したマッピングと競合する場合、新しい「話すための思考法」の習得を意味し、習得が困難であることが予想される。本研究では、中国語母語話者による日本語の「可能性」を表わすモダリティの習得調査を行い、第一言語と第二言語でマッピングの異なる文法の習得は第一言語の転移の影響を受けるか、及び第一言語のマッピングの影響を受けながらどのように学習者は新しい「話すための思考法」を習得していくかを分析する。本研究では、中国語では1つ (「能néng」か「可kě」で表わされる)、日本語では2つの形式で表現される「動的可能」を意味する動詞活用形 (例:「れる、られる、える」) と「許可」を表わす「てもいい」の習得調査を行う。

2. 言語類型論から見た日本語と中国語の「可能性」のモダリティ

言語類型論的なモダリティ研究の1つであるPalmer (2001) のモダリティ研究によれば、モダリティとは、非現実について言及するときの述定形式であり、屈折などの文法によって表現されるムード (mood) と助動詞などで表現されるモーダルシステム (modal system) によって構成される。このモーダルシステムを構成する助動詞などはモーダル

マーカ（modal markers）と呼ばれる。この定義にしたがい、本研究ではモダリティを意味する形式をモーダルマーカと呼ぶ。

モーダルシステムは、意思や願望を表す「動的モダリティ（dynamic modality）」、義務や許可を表す「行為拘束的モダリティ（deontic modality）」、命題の事実性に対する認識を表す「認識的モダリティ（epistemic modality）」、命題の事実性に対する証拠性を表す「証拠性のモダリティ（evidential modality）」の4つが普遍的なカテゴリーとして確認されている（e.g. Palmer 2001: 9-10）。また、モーダルシステムを構成するモダリティは可能性と必然性の変異系であるため、下位カテゴリーとしてそれぞれ「可能性」と「必然性」を意味するモダリティから成っている。例えば、「動的」モダリティは「動的可能性」である「能力」と「動的必然性」である「意志・勧誘」という下位カテゴリーから構成されている。表1と表2は、それぞれ日本語と中国語のモダリティの先行研究の中で、モダリティを形式と意味のマッピングの観点からの分類を試みている宮崎（2002）とLi（2003）の分類をPalmer（2001）の理論的枠組に基づいて分類したものである。⁽¹⁾

表1 Palmerの理論的枠組から見た日本語のモーダルシステム

可能性		
「動的」可能性 (Abilitive: 可能)	「行為拘束的」可能性 (Permissive: 許容)	「認識的」可能性 (Speculative: 蓋然性)
～できる ～える、～られる	～でもいい	～かもしれない
「動的」必然性 (Volitive: 意思・勧誘)	「行為拘束的」必然性 (Obligative: 必要妥当)	「認識的」必然性 (Deductive: 帰結性)
～う、～よう ～たい	～といい、～べきだ ～なければならない	～にちがいない ～はずだ
必然性		

⁽¹⁾ Palmer（2001）によれば「証拠性のモダリティ」を表すモーダルマーカとして法助動詞が使用されることはほとんどないこと、「証拠性のモダリティ」を可能性と必然性の選択的変異系で捉えることはできないということから、本研究においても「証拠性のモダリティ」は省略した。

表2 Palmerの理論的枠組みから見た中国語のモーダルシステム

可能性		
「動的」可能性 (Abilitive: 能力判断)	「行為拘束的」可能性 (Permissive: 許可)	「認識的」可能性 (Speculative: 蓋然)
能 néng, 会 huì, 可 kě, 可以 kěyǐ, 得 dé	能 néng, 可能 kěnéng 可 kě, 可以 kěyǐ	会 huì, 能 néng, 得 dé, 可以 kěyǐ, 可能 kěnéng,
「動的」必然性 (Volitive: 意思・願望)	「行為拘束的」必然性 (Obligative: 必要)	「認識的」必然性 (Deductive: 必然)
要 yào, 需要 xūyào, 得 děi	要 yào, 该 gāi, 应 yīng, 得 děi, 应该 yīnggāi, 应当 yīngdāng	该 gāi, 应该 yīnggāi, 得 děi, 要 yào
必然性		

表1、2から明らかのように、日本語においては1つのモーダルマーカ―は1つのモダリティの機能しか持たないが、中国語においては1つのモーダルマーカ―が2つ以上のモダリティとして機能する、つまり多義性 (polysemy) を持つことがわかる。例えば、日本語では「動的可能」を表わすモダリティは「れる」「られる」「できる」など、一般的に「可能形」と呼ばれる動詞の活用語尾で表現されるが、「許可」を表わすモダリティは「でもいい」という形式である。それに対応する中国語のモーダルマーカ―は「動的可能」と「許可」のモダリティとして機能するもの(「能néng」、「可kě」)と「動的可能」と「認識可能」のモダリティとして機能するもの(「会huì」、「得dé」)、あるいは3つのモダリティとしての機能を持つもの(「可kě」、「可以kěyǐ」)が存在する。このような多義性の有無という違いは日本語と中国語では意味・形式のマッピングが異なっているということの意味している。次節では、この多義性の有無から、日本語母語話者と中国語母語話者の認知過程の違いを考察し、中国語母語話者にとって「可能性」を表わす日本語のモーダルマーカ―の習得の困難な点を予測する。

3. モーダルマーカ―の多義性の有無に関する認知言語学的考察

モーダルマーカ―の多義性は、意味変化を伴う文法化 (grammaticalization) ⁽²⁾ によっ

⁽²⁾ 文法化研究とは、我々が目にする言語の文法はどのようにして生まれ、定着していくのか、文法がなぜ今あるような姿をしているのかを説明しようとする、歴史言語学の一分野である。例えば、「存在する」という意味の動詞「いる」という語彙の意味を表わす形式が「動作・状態の継続」を意味する「〜ている」に変化する通時的プロセスをいう。

て、古い用法（中核的用法）から新しい用法（派生的、周辺の用法）が派生した結果胸像するようになったためと考えられている（Traugott & Dasher 2003）。Bybee et.al. (1994) による言語類型論的な文法化研究では、75の言語のテンス、アスペクト、モダリティが文法化していく方向性に共通性が見られることが報告されているが、多くの言語に同様の方向性が見られるということは、様々な言語共同体に共通するような言語使用者の認知的プロセスに共通性が見られることを意味していると考えられる。可能性を表わすモダリティの文法化の方向性には一般的に（1）ability（「能力可能」）> root possibility（「状況可能」）> permission（「許可」）と（2）ability（「能力可能」）> root possibility（「状況可能」）> epistemic possibility（「認識可能」）という方向性が確認されている。以下は、本研究の対象となっている（1）のそれぞれの用法を例と文法化の方向性についての説明である。

(3) He *can* run a mile in five minutes.

(4) He *can* escape.

(5) He *can* go now. (Palmer 2001:9)

(3) は彼が5分間で1マイル走る能力があることを意味するので「能力可能」、(4) はドアに鍵がかかっていない状態などにおいて逃げるのが可能であることを意味するのでroot possibility（「状況可能」）、(5) は話者が彼に許可を与えることによって彼が「行く」という行為を可能にするので「許可」を意味する。Bybee et.al. (1994) の研究では、行為者にある行為の遂行を可能にする要因が行為者の内部に存在するものである(3)と行為者の外部に存在するものである(4)を別のモダリティとして考えているが、Palmer (2001) では外部世界の状況が行為者の能力に影響を与える場合もあるということから、「状況可能」を「能力可能」の一部と考えている。本研究でもPalmer (2001) に従って「状況可能」を「能力可能」の一部と考える。一方、(5)の「許可」は(3)(4)と違って主体がある行為の遂行することを主体以外の存在によって可能にする、つまりある状態の成立に主体以外の社会的存在がかかわっていることを意味するので、「許可」はこれらのモダリティよりも後に派生したものと考えられている (Bybee & Pagliuca 1985)。これらの

ことから(1)の文法化をPalmer(2001)の理論的枠組によって解釈すれば、(6)「能力可能」>「許可」という方向で文法化された、つまり「能力可能」の方が「許可」の用法よりもプロトタイプ的であることを意味する。

先述したように、中国語のモーダルマーカ―は「能力可能」と「許可」のモダリティの間で多義性が存在する。これは言語類型論的文法化研究に従えば、「能力可能」から「許可」の用法が派生した結果であると考えられる。一方、日本語のモダリティにおいて多義性が見られないことは、日本語のモダリティにおける「能力可能」と「許可」のモダリティの関係を意味変化という文法化で捉えることはできない。したがって、「能力可能」用法から「許可」用法が派生したという一方向性仮説によっても説明できないので、「能力可能」のモダリティのほうが「許可」のモダリティよりプロトタイプ的であるとは言えないであろう。以上のことから、中国語母語話者にとって「能力可能」と「許可」のモダリティを別のモーダルマーカ―で表わす日本語のモダリティは習得が困難であることが予測される。

4. 調査方法

本研究ではこのようなマッピングの違いを考慮して、機能主義言語学に基づく言語習得理論のひとつである競合モデルを用いたタスクの分析を行う。被験者は60名で、日本語能力試験2級の文法問題の正解率によって20名ずつ上級、中級、初級の3つのグループに分類した。被験者に与えられた文章を読んで、文脈の意味を表す適切なモーダルマーカ―を選択してもらうというものである。例を用いて説明すると、次のようになる。

(6) イギリスに留学していたので、彼は英語が()。

1. 話せる 2. 話すかもしれない 3. 話してもいい

(6)の例では被験者に()に入る最も適切なモダリティ形式を含む語句を選択肢の1~3から選んでもらう。選択肢は全て「可能性」を表わす形式から成る。このような問題を「能力可能」を正解とする問題を20問、「許可」を正解とする問題を20問の結果を集計して有意差検定を行った。それぞれのモーダルマーカ―を正解とする問題(10問ずつ)において、学習段階の違いによって選択するモーダルマーカ―に違いがあるかを調査し

た。そのため、正解のモーダルマーカ、正解と競合するモーダルマーカ（例えば「能力可能」が正解の問題では「許可」）、その他のモーダルマーカ（「認識可能」）の選択に関して学習段階によって差が見られるか、またそれぞれの学習段階において選択するモーダルマーカに差が見られるかを、有意差検定を用いて検査した。有意差が見られるものを* ($p < .05$) という記号を用いて表した。

5. 競合モデルの説明と競合モデル使用の意義

本研究の習得調査では、競合モデルに基づく分析を行うので、競合モデルについての簡単な説明を行なう。競合モデルとは機能主義文法に基づく仮想的な発話処理モデルで、表面の形式と下部構造の意味・機能の関係、つまりマッピングを説明するのに適している。競合モデルの利点は、①形式と意味・機能のマッピング関係を直接的に説明できるので、マッピングが1対1でなく、同じキューが違う機能を表現する場合、つまりマッピングが1対2、あるいは1対3以上の場合に適用できる。②同じキューが違う機能を表現することから、キューの相対的な強さの違いを利用して、第二言語習得の段階を分析できるということである。

第二言語としてのモダリティの習得研究では、学習者がどのモダリティを早く習得するかという研究が多くみられる（例:Ramat 1992, Dittmer&Terborg 1995）。しかし、これらの研究において、モダリティ使用における第一言語転移や中間言語の発達について言及しているものは見られない。一方、第二言語及び外国語としての日本語の習得研究の中には、モダリティの習得研究自体あまり見られない。

これらの理由として、先述した先行研究を含むモダリティの習得研究のほとんどが、研究方法として学習者の発話の表出データを分析するもの（Solicitation technique）であるためであると考えられる。他の言語における第二言語としてのモダリティの習得研究は、主に受け入れ国での滞在年数が比較的長い移民を対象とした研究である。しかし、このような研究方法では、モダリティの表出が確認されるまでに長期にわたる横断的調査が要求されるため、滞在期間が比較的短い留学生を対象とした日本語教育においてはデータの収集が困難であることが考えられる。

本研究で用いる競合モデルは仮想的な発話処理モデルであり、学習者の理解の段階と表出の段階を同じと考えている。したがって、被験者が対立するキューの中から形式と意味

のマッピングを行うというタスクによって学習者の理解をもって表出と捉え、学習の初期段階から習得状況を分析することが可能となる。またマッピングがキューの相対的な強さによって決定されるという特徴を利用すれば、学習者を母語と目標言語の間に位置づけることができる。つまり先行研究では十分明確にされることのなかった第一言語転移や中間言語の発達の様子の分析も可能となると考えられる。

6. 調査結果と分析

6-1 「能力可能」の習得

図3は、「能力可能」を正解とする問題10問の答えである。

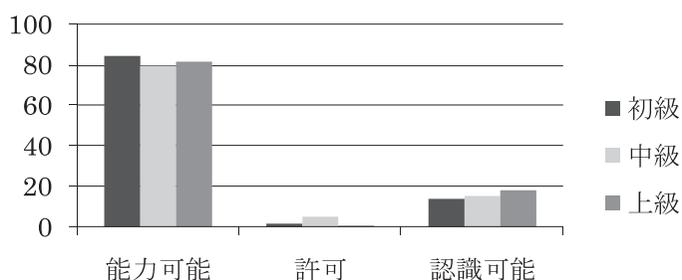


図3 「能力可能」を正解とする問題の回答結果

表3 学習レベルによる「能力可能」「許可」「認識可能」の選択の違い

	初級・中級	中級・上級	初級・上級
能力可能			
許可			
認識可能			

表4 学習段階から見たモーダルマーカの選択の違い

	初級	中級	上級
能力可能・許可	*	*	*
許可・認識可能			
認識可能・能力可能	*	*	*

* ($p < .05$)

図3は、どのレベルの学習者も「能力可能」を意味するモーダルマーカ―を選択していることを意味する。表3の有意差検定でも、モーダルマーカ―の選択において学習段階による違いが見られないことを示唆している。表4は、どのレベルの学習者も「能力可能」のモーダルマーカ―の選択において他のモーダルマーカ―との選択に迷っていないことを示している。つまり、「能力可能」のモーダルマーカ―の習得は、学習レベルにかかわらず比較的簡単であることがわかる。

6-2 「許可」の習得

図4は、「許可」を正解とする問題10問の答えである。

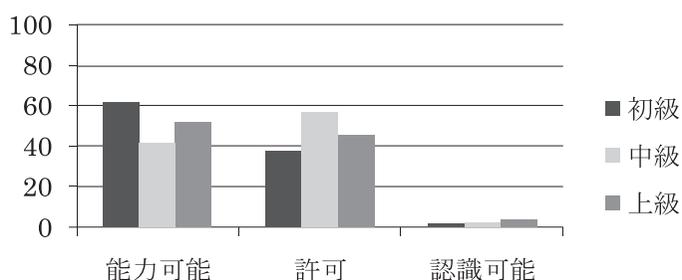


図4 「許可」を正解とする問題の回答結果

表5 学習レベルによる「能力可能」「許可」「認識可能」の選択の違い

	初級・中級	中級・上級	上級・初級
能力可能	*		*
許可	*		*
可能性			

* ($p < .05$)

表6 学習段階から見たモーダルマーカ―の選択の違い

	初級	中級	上級
能力可能・許可	*	*	
許可・認識可能	*	*	*
認識可能・能力可能	*	*	*

* ($p < .05$)

まず、図4からわかることは、「許可」のモーダルマーカ―が正解の問題では、「能力可能」のモーダルマーカ―を正解とする問題に比べて、どのレベルの学習者も「能力可能」と「許可」の選択に迷う傾向があるということである。初級学習者と上級学習者は「許可」が正解の問題でも「能力可能」を選択する傾向があるが、中級学習者は「許可」を選択することを示している。

これは、「許可」を表わすモダリティと「能力可能」の一部である「状況可能」が類似していることに関係していると考えられる。例を用いて説明すると次のようになる。

(7) 先生：「次の日本語のテストでは辞書を（ ）。」

1. 使ってもいいですよ 2. 使えますよ 3. 使うかもしれませんよ

(8) 喫煙席とは、たばこを（ ）席という意味だ。

1. すってもいい 2. すえる 3. すうかもしれない

(7) の問題では辞書を使うという行為を遂行する主体の動作を先生という主体以外の存在によって可能にする、つまりある状態の成立に主体以外の社会的存在がかかっていることを意味することが明白である。しかし、(8) のように主体以外の社会的存在の有無が明白でない場合、「状況可能」と解釈することも可能である。したがって、「許可」を正解とする問題では、学習者が主体以外の社会的存在の有無をキューとして「許可」のモーダルマーカ―を選択しているかどうかを考慮する必要がある。

下の図5は「許可」を与える主体が明示的な問題の回答結果、図6は「許可」を与える主体が暗示的な問題の回答結果を表わしたものである。

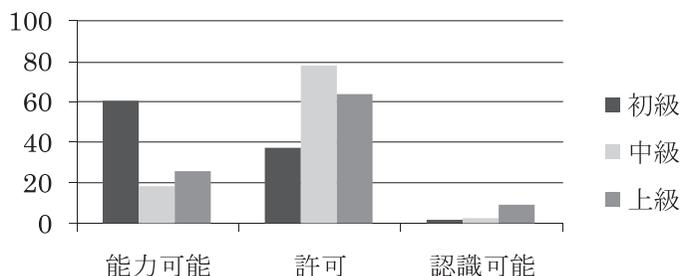


図5 「許可」を与える主体が明示的な問題の回答結果

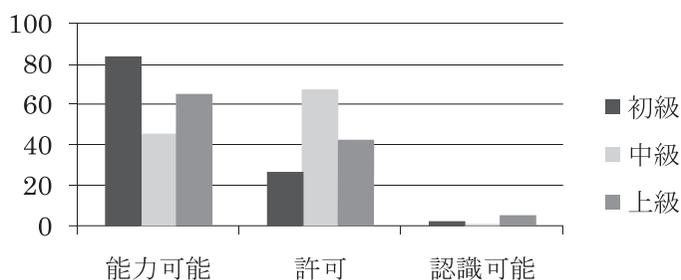


図6 「許可」を与える主体が暗示的な問題の回答結果

図5と図6を参考にしながら、図4の結果を分析する。図4の結果は初級学習者と上級学習者は「許可」が正解の問題でも「能力可能」を選択する傾向があり、表5の有意差検定でも初級学習者は他の学習者より「能力可能」を選択する割合が高いことを示している。また、図5、図6から、初級学習者は「許可」を与える主体の存在が明示的か暗示的かというキューの違いにかかわらず「能力可能」を選択していることがわかる。したがって、初級学習者の「能力可能」の選択は「能力可能」がプロトタイプ的である第一言語である中国語の知識の意図的・無意図的転移をストラテジーとして使用していると考えられる。

図4から、中級学習者は他の学習者に比べて「許可」のモーダルマーカを選択する割合が高いこと、図5、図6から、中級学習者は「許可」を与える主体の存在が明示的な場合でも暗示的な場合でも、「許可」のモーダルマーカを選択する割合が高い。この結果は、「能力可能」と「許可」が別形式で表わされるという第二言語である日本語固有のマッピングに敏感になっているために起こる過剰一般化であると解釈することができる。

図4から、上級学習者は「許可」のモーダルマーカを正確に選択しながらも、「能力可能」を選ぶ割合も高いことを示している。しかしそれは、図5、図6から、上級学習者は「許可」を与える主体が明示的な場合は「許可」を、暗示的な場合は「能力可能」を選択した結果であることがわかる。

実際の日本語の運用において、「許可」を与える主体が明示的な場合でも暗示的な場合でも「許可」のモーダルマーカを使用してもいいので、中級学習者の「許可」の過剰一般化は誤りとは言えないであろう。しかし、競合モデルのキューの概念に基づいて「許可」と「能力可能」を区別することにより、異なる学習レベルの学習者が異なる学習ストラテジーを使用していることを分析することができた。

7. まとめ

本研究では中国人日本語学習者による「可能性」を表わすモーダルマーカの習得を例に、第一言語と第二言語で意味・形式のマッピングが異なる文法を学習者が習得する過程の分析を行った。本研究では中国語では1つ、日本語では2つで表わされる「能力可能」と「許可」を表わす日本語のモーダルマーカを対象とした。その結果、「能力可能」のモーダルマーカはどの学習レベルの学習者にとっても比較的習得が簡単であったが、「許可」を表わすモーダルマーカの習得状況は学習者のレベルによって異なるという知見を得た。しかし本研究は第一言語とマッピングの異なる文法の習得過程は、第一言語のマッピングの影響を受ける段階、第二言語固有のマッピングを過剰一般化する段階を経て、正しいマッピングの仕方を習得する段階に至るということを示唆している。本研究では競合モデルを用いたタスクに基づく習得調査を行ったが、キューの概念を利用してそれぞれのレベルの学習者が用いるストラテジーを分析することが可能になった。

本研究では中国人日本語学習者を対象としたが、モーダルマーカの多義性は中国語に限らず類型論的に異なる多くの言語に見られることから、他の言語を第一言語とする学習者にとっても日本語のモダリティの習得において共通の問題であると思われる。したがって、本研究でPalmer (2001) の言語類型論的モダリティ研究によって日本語と中国語のモダリティの意味・形式のマッピングを行ったように、日本語教育の実践において言語間の普遍性と個別性の両面をとらえ、間言語的一般化を提示する言語類型論の視点を導入することが有効であると考えられる。また、学習者の第一言語とマッピングが異なる文法の教授においては、競合モデルのキューが表わすような機能論的観点からマッピングの違いを説明することが有効であると考えられる。

参考文献

- 宮崎和人、安達太郎、野田春美、高梨信乃 (2002) 『モダリティ』東京：くろしお出版
- Bates, E. & MacWhinney, B. (1981) "Second Language Acquisition from a Functional Perspective: Pragmatic, Semantic & Perceptual Strategies". In H. Winitz (ed.) *Annals of Science Conference on Native and Foreign Language Acquisition*. 198-219. New York: New York Academy of Sciences.
- Bybee, J. R. & W. Pagliuca. (1985) "Cross-linguistic Comparison and the Development of Grammatical Meaning". In J., Fisiak (ed.) *Historical Semantics and Historical Word Formation*. 59-83. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Bybee, J., Perkins, R. & Pagliuca, W., & Perkins, R. (1994) *The Evolution of Grammar, Tense,*

- Aspect and Modality in Languages of the World*. Chicago. Chicago University Press.
- Bybee, J., R. Perkins and W. Pagliuca (1994) *The Evolution of Grammar, Tense, Aspect and Modality in Languages of the World*. Chicago: Chicago University Press
- Dittmar, N. & Terborg, H. (1991) "Modality and Second Language Learning: A Challenge for Linguistic Theory" . In H., Heubner. & C., Ferguson. (eds.) *Crosscurrents in Second Language Acquisition and Linguistic Theories*. 347-84. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Hopper, P. J. and E. C. Traugott (2003) *Grammaticalization, 2nd ed.*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Li, R, Z. (2003) *Modality in English and Chinese: A Typological Perspective*. Amsterdam: Lighting Source Incorporation.
- Palmer, F. (2001) *Mood and Modality 2nd ed.*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Ramat, A.G. (1992) "Grammaticalization Processes in the Area of Temporal and Modal Relations". *Studies in Second Language Acquisition* 14.3.4, 297-322.
- Slobin, D. (1994) Talking perfectly. discourse origins of the present perfect. In W, Pagliuca (Ed.), *Perspective on Grammaticalization*, pp. 119-23. London.: Longman.
- van Patten, B., J. Williams, S. Rott and M. Oversheet. (2004) *Form-Meaning Connections in Second Language Acquisition.*, New Jersey.: Lawrence Erlbaum Associations, Inc.

研 究 紀 要
第52・53合併号

平成22年 2月25日 印刷

平成22年 2月28日 発行

編集発行 高 松 大 学
高 松 短 期 大 学
〒761-0194 高松市春日町960番地
TEL (087) 841-3255
FAX (087) 841-3064

印 刷 株式会社 美巧社
高松市多賀町1-8-10
TEL (087) 833-5811